

等の構想はぜひとも早急に実現しなければならないとしても、まず学内の人々が地域を意識し、大学人として地域に対して何が提言できるかを自分なりに模索することこそ、最も重要であると考えます。

移転後の生活状況

福山から西条へ

—— 流転の中での生活 ——

教育学部 三好啓士

教育学部福山分校の西条キャンパスへの移転作業の中で、平成元年8月7日、その出発式が行われ、藤谷分校主事他によるテープカットの後、移転荷物を満載した大型トラックが列をなしてゲートをくぐり、西条へ向けて出発した。その中には荷物だけではなく、福山分校の歴史も積み込まれていた。移転によってもその歴史は消え去るものではない。この出発式は、同時に9月30日までの福山分校の終了式として40年の歴史を閉じる予告でもあり、また西条へ向けて、教育学部の統合として、過去とともに未来への研究・教育の充実を目指した、多少の不安も含みながらも明るい未来への期待を積み込んでの出発であった。そして今、8月下旬までの精神的にも肉体的にも苦しい移転作業を経て、9月になり新教育学部として新しい建物、新生活での混迷の中で、それは新しい場所と2部局統合による混迷だが、研究・教育活動が始まり、10月からの完全統合として未来へ、教育学部の発展へと歩み出している。そして移転後の生活状況を述べるのには過去としての福山分校と移転のプロセス、統合後の教育学部の関連の中で考えてこそ真の意味が伝わるのではないかと考えている。なお、ここでの生活とは教育学部での研究・教育・事務などの生活、それにかかわっての日常生活を指している。

地域の変革におけるあらゆる局面に広島大学が与えるインパクトの大きさに気づき始めた市民は、その動向をあらためて注視しているのだ。

福山分校の思い出はつきない。多くの喜びも悲しみも40年の年月の中で醸造された。それをもたらしたのは分校が福山という広島から離れた遠隔地での存在にあった。それは地理的・時間的距離もさることながら同じ教育学部なのに2部局に分離されていたことであり、それには長所も短所もあった。まず、大学の外部から分校の存在が正しく認識されず、分校という語から過少評価された面もあったことなどである。福山分校は音楽・体育・家政3科の教官と学生、5科・教職関係の教官及び事務官よりなる小さなまとまりとして独立した管理・運営、研究・教育の組織と設備をもち、それぞれ専門的に研究・教育を深め、教官も事務官などの職員も学生も、特に教科の特性も含んで、1家族のようにまとまり、人間的交流も研究・教育の交流も深めてこれたと思う。また市民との交流も深く、少しは福山市のために役立てたと自負している。今は西条キャンパスに移転したばかりの流転の中で成果も挙がっていないし確言はできないが、今の西条での生活、特に日常生活と比較すると分校にかかわっての諸生活の方が良かったとさえ思える。しかしその反面、分校にかかわっては研究・教育・生活とも「井の中の蛙」的な自己満足と見識の狭量さもあったことは否定できない。

広島との距離、それは地理的・時間的・心理的にも、研究その他でも、を特に感じたのは広島での会議、研究会などに参加した時である。それは統合・移転にかかわる話し合いが始まってから顕著になった。博士課程も整備されたし、建築計画、研究・教育体制、組織の確立、管理・運営組織などの整備について話し合いが進められ、両部局の歩みにより新教育学部確立へ向かって多くの努力がなされたが、その距離が狭まるには時間がかかった。それは広島方面から、福山方面からの西条キャンパスの教育学部棟への通勤の現状に似ている。ともあれ1学部がそのまま移転するのに比べて教育学部の場合はそれぞれ異なる歴史をもち距離も離れた2部局が移転し統合するので、その調整は複雑であり、具体化するにつれてその困難さも増してきた。これらの統合のための努力がみのり始め、基盤づくりと連動して実際の移転作業の立案と実施が始まったが、これは大変な労苦を伴い、中でも会計係を中心とする事務局の日夜にわたる努力には感謝とともに敬服する。そしてそれは新教育学部の研究室などの構成や研究・教育計画に対応させての移転作業計画、移転物品の選択・構成などであった。そして長年の歴史の中で蓄えられたものは研究・教育の成果ばかりではなく、それに関連しての膨大な資料や備品などであった。どうやら計画がたち、実際の作業が始まったが更に辛苦が増した。これらの膨大な資料・備品などの、多忙な中での梱包・搬出・搬入作業、それは教官・事務官・学生の協力の上に成り立った苦しい作業であった。

これらの苦勞を乗り越えてやっとたどり着いたのが異国の地ともいえる西条にあり夢の国である新教育学部なのであるが、我々を待っていたのは事後処理と「未整備」であった。新教育学部の建物は昨年秋に完成していたのに（音楽棟は今夏）周辺の道路などまだ作業中で、それなりの理由はあるのだが9月末の時点でも未完成であった。8、9月の多雨のゆえで、まさに泥沼の中に建物が存在し

た。3階建ての音楽棟は本館側からは2階建てに見える。それもあって音楽棟はこの泥沼の中で浮き沈みしているようにさえ見えた。これらのことは広島大学の統合・移転の過去から未来への状況の象徴とさえ思える。

この「未整備」の中の重要な問題の一つは体育館がまだ建設されていないことで、体育教育に重大な支障となっているので早急に建設されることを望んでいる。また実験などの研究・教育設備の不備・劣悪化や学内の特に学生の日常生活を支えるための施設の不備は早急に改善されるべきである。この他カリキュラムの整備など解決すべき問題が作業中の泥のように山積している。

現時点での研究・教育とその生活に関わる重大な不備は交通問題と住居問題にある。交通問題の中で特に問題となるのは西条キャンパスとJRの駅とを結ぶバス便のことであり、9月20日の改正でも運行回数は少なく、乗車時間・待ち時間は長く、料金は高く、JR電車のダイヤとの関連も悪く、まだ不便で生活に支障が生じる。結果的に他の交通手段の採用となり悪循環となる。住居問題も深刻である。東広島市の都市としての未開発、地価の急騰、住居需要の急増で市内への居住は困難となった、遠さや日常生活の不便さを我慢すれば別だが、このことは家族構成のことなどから単に大学の宿舎への入居だけでは解決しない。長年住みなれた家、家族との同居、教育問題、日常生活の便利さ、文化的な生活、住居入手の困難さなどから結果的に遠距離通勤をすることになり、広島方面や福山方面からのJR在来線・新幹線他の電車、不便なバス、自家用車など複数の交通手段での多大な時間・経費・体力・気力の消耗を伴いながらの通勤・通学となり、これでは研究・教育生活はどうなるのであろうか。この回避策として単身赴任もあるが、2重生活の諸問題、家族との分離・日常生活の不自由・経費の増大などでやはり負担は大きい。このように交通問題と住居問題は連動している。出来るだけ早いうちの、後続の学部にとって不利な状況の

解決となる改善を望む。先人の苦勞が偲ばれる今日この頃である。

今まで現在の移転したばかりの状況の中で、生活の不都合な面を指摘して来たが、これから未来を、広島と福山から西条へ集まり統合した新教育学部として研究・教育が充実する明るい未来を築くのであり、この発展がなければ統合の意義がない。そして広島大学の統合・移転が完結した時、総合大学としての存在意義が問われることになるだろう。とも

あれ、西条キャンパスの自然環境はすばらしく、広いし緑も多く遠くの山々を望んで雄大で、この中で大学も人も大きく育つ。ここに来ること自体は楽しみであり希望が育ち、この時ばかりは福山を忘れる。この西条の地で、このすばらしい自然の中で、そして流転の生活での泥沼・混迷の中から、教育学部に立返れば広島と福山の統合、広島大学の統合完成によって、どんな美酒が醸造されるのであろうか。

